

第55号

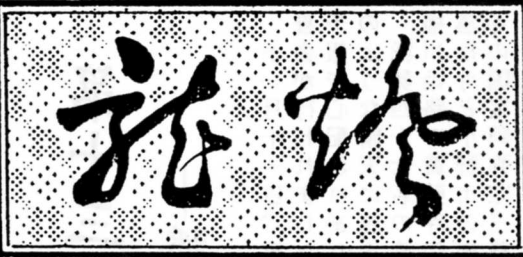
大阪市史跡 龍溪禪師墓所 霊龜山九島院

発行所

〒550-0022 大阪市西区本田3丁目4番18号
TEL 06(6583)2725 FAX 06(6583)0908

発行者

第二十五世住職 奥田啓知(智證)



平成二十一年春 阪神なんば線開通

「空白の一日」から28年

負い目をバネに生きよう

あの「空白の一日」から二十八年、因縁の二人が初めて言葉

林さんを追い出す原因になった「空白の一日」に負い目を感じていた江川さんが、酒を酌み交わすうちに、二人のわだかまりが少しずつ溶けてくる様子が印象的でした。

「空白の一日」とは、昭和五十三年十一月二十一日、プロ野球ドラフト会議の前日、野球協

ドイツの実存主義哲学者のヤスベルスは、「負い目」を強調し、わたしたち人間は、誰もが他人に対して大きな「負い目」があると言っています。

約の不備をつけて江川卓投手が巨人軍と入団契約をしたものの無効となり、翌日のドラフト会議で阪神タイガースが江川投手

例えば、大学の入学試験にパスしたのは、試験に落ちた大勢の人間の無念さの上に自分の合格があり、彼らに対して「負い目」があり、結婚した男は、自分の妻と結婚したかった他の男性に「負い目」がある。われわれ人間は、他人への「負い目」を自覚せよと言っています。

一位指名し紛糾した事件です。事態の收拾のため、翌五十四年巨人からトレードで小林繁投手が阪神へ移籍し、江川投手が

そして、「負い目」を自覚しそれを償うべき責任を果たせと説いています。大学生は、落ちた人の分までしっかりと勉強し結婚した者は、自分の妻を他人の分まで愛することによって、「負い目」を償えるのだと。大きな事故で生き残った人が、死

を語り合い、酒を酌み交わしました。黄桜の新聞広告には、「一生話しをすることは無い、と思っていた」一度でいいから話したい、と思っていた」と見出しがおどりと、テレビのCMでは、巨人を愛しながらも去らざるをえなかった小林繁さんと小

潤滑材のお酒があったからとはいえ、二人が「空白の一日」を人生のテーマとして生きてこられたからこそ、見る人の心をひきつけるCMになったのではないでしようか。酒は『般若湯』ともよびます「人の気持ちを柔らかくし胸の奥にあるものにそっと花を添える」(CMより)酒の効能には般若(智慧)の力があるように思えます。くれぐれも「命を削るカンナ水」にならぬように。



江川 卓(えがわ・たくる) 1984

